

## 島根県立看護短期大学における 歯科保健対策の現状と課題

内藤 典子・福澤陽一郎

### A Study on Caries and Gingivitis Prevention in Nursing Students

Noriko NAITO and Yoichiro FUKUZAWA

#### 概 要

高齢社会を迎え、口腔機能の保持増進が重要な課題となるなか、本学では、学生定期健康診断に歯科検診を設け、併せて事後指導を実施している。検診の結果、齲蝕の罹患状態は9割前後と、高い所見率を示した。歯垢の付着状態については年次によって4割を超え、歯肉の炎症状態は2割前後と、多くの学生が、何らかの口腔疾患に罹患している現状が示された。10年度在学生を対象に行った、歯科保健アンケート調査の結果では、ほぼ全学生が1日に2～3回の口腔刷掃を施行しており、またキシリトールに対し、高い関心の程度が示された。これらの結果を基に、本学における歯科保健対策の課題を検討し、より詳細な学生の実態把握と、事後指導における、歯科保健指導の体制づくりの必要性を明らかにした。

キーワード：大学生、歯科検診、保健指導、齲蝕、歯周疾患

#### I. はじめに

歯は、咀嚼によるエネルギーの摂取、音の調節による意志の疎通、表情を作り出し、意志及び感情表現の一部をなすなど多くの役割を持つ<sup>1)</sup>。人生80年時代が到来しているなか、平成元年、成人歯科保健対策検討会中間報告において「8020運動」が提言された。80歳で20本以上の自分の歯を保持することを目的とし、厚生省や歯科医師会を中心に、運動がすすめられている。

近年では、歯と全身の健康状態との関連が叫ばれ、研究が進められるなど、高齢社会を迎え、生涯を通じた継続的な歯科保健行動の推進が欠

かすことの出来ない重要な課題となっている<sup>2)</sup>。

齲蝕は、学校保健上、最も多い罹患状態を示すものの1つであり、成人の歯科疾患保有率は非常に高い。一方、大学における歯および口腔の検査については、学校保健法施行規則において、「検査項目から省くことができる」項目とされている。歯科検診の実施大学は、全体の1割程度<sup>3)</sup>と低い実施状況であり、大学生を対象とした、歯科保健に関する報告は少ない。本学では、島根県内の他短大が、歯科を検診項目に導入している実績とその意義をふまえ<sup>4)</sup>、開学時より歯科検診を実施している。

横山ら<sup>5)</sup>により、学生の健康実態から歯の管

理の重要性について報告がなされたが、本学における歯科保健対策は、まだ十分検討されていない。4ヶ年の歯科検診、アンケート調査をもとに、本学における歯科保健対策の課題を検討した。

## Ⅱ. 研究方法

島根県立看護短期大学では、開学時より表1に示した歯科検診及び事後措置を実施している。検診時に得られたデータを基に、学生の口腔疾患の現状を把握する。

また平成10年度在学生全員に対し、歯に関する生活行動、意識を調査する目的で、自己記入式のアンケート調査を平成10年9月に実施した。

## Ⅲ. 結 果

歯科検診の受診率は、平成7、8年度100%、平成9年度99.2%、平成10年度98.0%と、ほぼ全学生が受診している。

### 1. 齲蝕の状況

表2に本学の齲蝕罹患状態を示した。本学の学生はいずれの年次についても、罹患状態が9割前後と、高い所見率を示している。未処置歯（齲蝕）保有者は約3割、年次によっては4割を越えていた。

図1は、7、8年度入学生の3ヶ年、9年度入

学生の2ヶ年の未処置歯（齲蝕）保有者の推移を示した。7年度入学生は、2年次に30%から39%に増加がみられ、3年次に35%とやや改善された。8年度入学生は7年度入学生同様、2年次に36%から42%に増加したが、3年次において25%と、低い値を示した。9年度入学生は、37%から、2年次に29%と減少している。

表2 齲蝕罹患状態

		齲蝕のある者			人(%)
		総数	未処置歯有	処置歯有	
平成7年度	1年次	76 (92)	25 (31)	50 (61)	7 (8)
平成8年度	1年次	72 (86)	30 (36)	42 (50)	12 (14)
	2年次	76 (92)	31 (37)	45 (54)	7 (8)
平成9年度	1年次	77 (93)	30 (36)	47 (57)	6 (7)
	2年次	75 (89)	35 (42)	40 (47)	9 (11)
	3年次	76 (92)	27 (33)	49 (59)	7 (8)
平成10年度	1年次	75 (90)	23 (28)	52 (62)	9 (10)
	2年次	77 (93)	24 (29)	53 (64)	6 (7)
	3年次	77 (92)	21 (25)	56 (67)	7 (8)
	専攻科	41 (93)	14 (32)	27 (61)	3 (7)

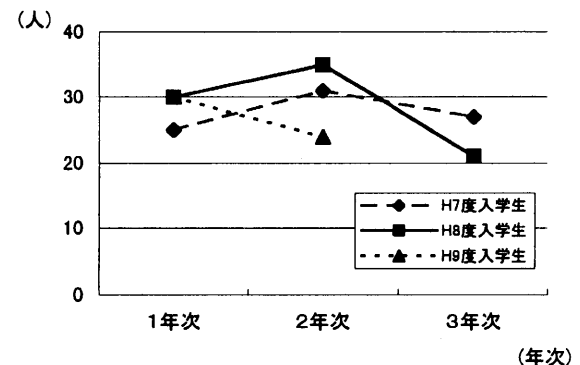


図1 未処置歯（齲蝕）のある者の推移

表1 本学における歯科検診

す す め 方	学校保健法第6条に定められる定期の健康診断において歯科検診を実施。実施時期は、毎年4月中旬で、全学生を対象としている。																
検 査 方 法	嘱託の歯科医師1名と、歯科衛生士1名および補助の学生1名により検査を実施した。 平成10年度検診では、学生1人当たりの検査所用時間は、およそ75秒。																
診 察 内 容	学校保健法施行規則に基づく検査項目。 ○現在歯：齲蝕（処置歯/未処置歯）、要注意乳歯、要観察歯 ○喪失歯：喪失歯の有無 ○歯列・咬合・顎関節：歯の並びの状態、噛み合わせの状態、顎関節の状態 ○歯垢：歯垢の付着状態 ○歯肉：歯ぐきの炎症状態																
判 定 基 準	下記の項目については、3段階評価。 <table><tr><th></th><th>0</th><th>1</th><th>2</th></tr><tr><td>歯列・咬合・顎関節</td><td>異常なし</td><td>定期観察必要</td><td>歯科医による診断が必要</td></tr><tr><td>歯垢の付着状態</td><td>殆ど付着なし</td><td>若干の付着あり</td><td>相当の付着あり</td></tr><tr><td>歯肉の炎症状態</td><td>異常なし</td><td>定期観察必要</td><td>歯科医による診断が必要</td></tr></table>		0	1	2	歯列・咬合・顎関節	異常なし	定期観察必要	歯科医による診断が必要	歯垢の付着状態	殆ど付着なし	若干の付着あり	相当の付着あり	歯肉の炎症状態	異常なし	定期観察必要	歯科医による診断が必要
	0	1	2														
歯列・咬合・顎関節	異常なし	定期観察必要	歯科医による診断が必要														
歯垢の付着状態	殆ど付着なし	若干の付着あり	相当の付着あり														
歯肉の炎症状態	異常なし	定期観察必要	歯科医による診断が必要														
事 後 措 置	以下の者について、医療機関での治療又はブラッシング指導を促す。 ①齲蝕があり治療の必要がある者 ②歯垢の付着程度が1以上で歯垢除去の必要がある者 ③歯肉の炎症状態が1以上の者 受診は、本人の意志に任せており、治療終了書等の提出は行っていない。																

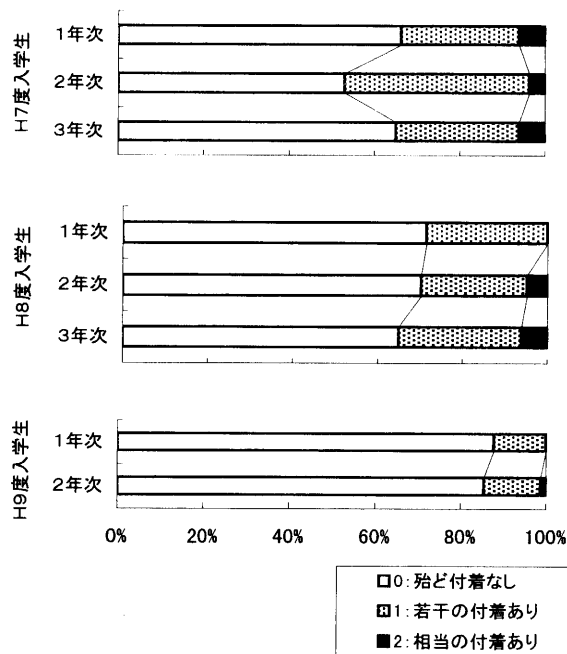


図2 歯垢の付着状態

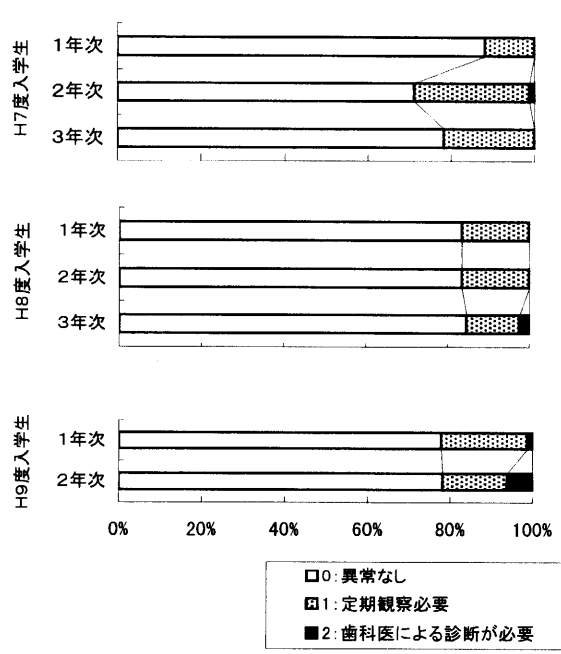


図3 歯肉の炎症状態

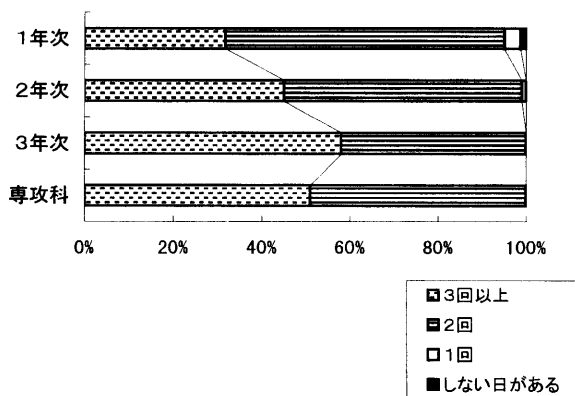


図4 1日の歯磨きの回数

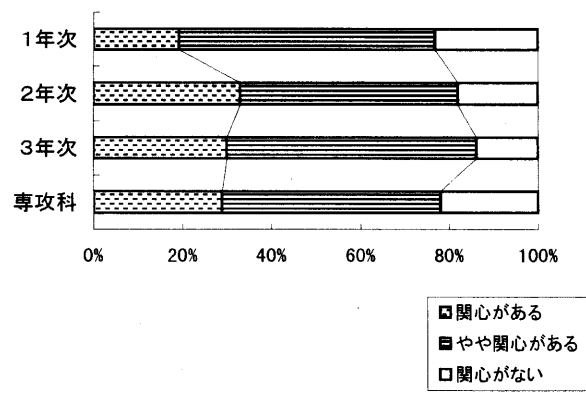


図5 キシリトールに対する関心

## 2. 歯垢の付着状態

図2に7, 8年度入学生の3ヶ年, 9年度入学生の2ヶ年における歯垢の付着状態の推移を示した。

受診を必要とする1, 2の判定者数は入学年次により推移が異なる。7年度入学生は1年次に33%, 2年次に47%と増加したものの, 3年次に34%と1年次の水準に戻っている。8年度入学生は1, 2年次ともに約30%であるが, 3年次に36%と若干, 増加している。9年度入学生は1, 2年次ともに約14%である。入学時期が後になる程, 所見率がやや低下している。

## 3. 歯肉の炎症状態

図3に7, 8年度入学生の3ヶ年, 9年度入学生の2ヶ年における歯肉の炎症状態の推移を示した。

受診の必要のある1以上の判定者は, 歯垢の付着状態と同様, 入学年次によって推移が異なる。7年度入学生は1年次には12%であるが, 2年次に29%と大幅に増加, 3年次に22%とやや改善された。8年度入学生は, 3ヶ年通して約17%であり, 3年次に2の判定者が, 割合は少ないが認められる。9年度入学生は1, 2年次ともに22%, 2年次に2の判定者の増加が認められた。

#### 4. 歯科保健アンケート調査

1日における歯磨きの回数は、2, 3回行うとの回答が3年次と専攻科では100%であり、2年次、1年次と学年が下がる程、割合はやや低下しているものの、9割以上を占めた(図4)。キシリトール入りのガム、菓子に関心があるかとの質問に対し、関心がある、やや関心があるとの回答を含めると、いずれの学年も約8割と高率である(図5)。関心があるのみを比較すると、1年次生は他の学年に比べて10%前後低い割合であった。

齲蝕、歯周病予防のために、今後、積極的に取り組みたいと回答した学生は、図には示していないが1年次で58%、2年次以上では約70%であった。

#### IV. 考 察

本学の歯および口腔の状態のうち齲蝕状態は、平成5年度の女性18~20歳の全国平均とほぼ同様の、9割程度であった。齲蝕は、小児の疾病といって差し支えない程、学童以下のところで多発し、小学校入学時には82.7%の者が罹患している<sup>6)</sup>。大学入学の時点で齲蝕に罹患していない者は、10%前後であり、高率の罹患状況を示している。

齲蝕と歯周病は代表的な生活習慣病であるが、歯について保健指導を受けるのは小学生時が多く<sup>2)</sup>、大学での歯科保健対策は、体制が整っていない現状がある。

本学における未処置歯(齲蝕)保有者の推移は、8年度入学生において一度悪化したものの3年次に改善傾向が認められ、また9年度入学生の2年次では、減少がみられた。

本学は開学当初より、学生定期健康診断項目に歯科検診を設け、実施している。佐野ら<sup>7)</sup>は、大学生に対して歯科疾患の早期発見や事後指導を行うことは、健康者の増加、要治療者の減少に繋がり、意義の有る事であると報告している。大学生に対する歯科検診は学校保健上、実施が義務づけられていないが、年に1度の定期検診は、齲蝕及び歯周疾患の早期発見、早期治療に重要であり、今後も継続実施していく必要がある。

歯周疾患の状況は、全国平均が3~4割、本学学生は約2割と、全国平均より低い数値を示した。この相違は、判定法が多少異なる点、歯科医間の判定の差、看護学生である等の特性等が考えられるが、今回の調査では明らかではないため、今後、県内他短大との比較等により検討していきたい。

本学における歯垢の付着程度、歯肉の炎症状態の推移は、8, 9年度入学生について、横這いか、若干の悪化がみられる。

歯垢の除去や歯肉炎の改善には、ブラッシングが最も有効であり<sup>8)</sup>、また吉田<sup>9)</sup>は、子供の頃に覚えた齲蝕予防中心のブラッシング方法から、歯周病予防に適した方法に変える必要があることを述べている。本学では、歯肉の炎症状態が1以上の者に対し、医療機関でブラッシング指導を受けることを勧めている。健康診断という学校行事を通して歯科保健の学習および指導を行うことは、教育効果の点からも大きい<sup>10)</sup>ことから、10年度は、全学生に対し、齲蝕、歯肉炎予防に関する保健指導を実施した。

歯周疾患予防を的確に行うには、歯科検診だけでなく刷掃指導を繰り返す行うことが重要であり<sup>11)</sup>、継続的、系統的な歯科保健指導の体制づくりが求められている。

また、多くの学生が、1日に2, 3回の口腔刷掃を施行しており、日常生活に定着している実態が明らかになったが、ブラッシング方法、歯肉炎、学生の間食の実態等に関する調査は充分ではない。今後、学校歯科医の協力のもと、問診項目に歯科に関する質問事項を設ける等により詳細な実態把握が必要である。

キシリトールへの関心、口腔疾患予防に対する本学学生の関心は高いが、1年次は、他学年より低値を示している。1年次学生を対象とした保健指導は、より口腔疾患予防の動機付けに重点をおくなどの配慮が必要である。

歯科保健活動は健康増進及び疾患予防を志向した活動であり、単に身体の問題だけでなく、それにかかわる生活(環境)をも考慮した健康診断と、保健指導を柱にした教育的アプローチ

とが有機的に機能しながら展開されるべきであり<sup>2)</sup>、そのような体制づくりが、本学においても早急にすすめられる必要がある。

## V. ま と め

本学では、定期的に歯科検診および事後指導を実施しており、今回、4ヶ年の齲蝕の状態、歯垢の付着状態、歯肉の炎症状態を表し、歯科保健アンケート調査結果と併せて、現状を示した。これらの結果から、成人の若年層を形成する本学の学生に対し、どのような歯科保健対策が必要であるか検討し、より詳細な学生の実態把握と、事後指導における歯科保健指導の体制づくりが、今後の課題であることを示唆した。

## 謝 辞

より充実した歯科検診にするために御指導、御助言をいただいた藤江克彦先生に深謝いたします。歯科保健対策のために、検診結果やアンケート結果をまとめることに理解を示した学生の皆さんに、こころよりお礼申し上げます。

## 引用文献

- 1) 国立大学等保健管理施設協議会編：学生と健康，国立大学等保健管理施設協議会，1996.
- 2) 楠 賢治：歯科保健，ぎょうせい，1995.
- 3) 国立大学等保健管理施設協議会編：学生の健康白書1995－基本編－，国立大学等保健管理施設協議会，1997.
- 4) 手島由美子・福澤陽一郎・岡本敬子他：歯科検診結果の現状と課題(第1報)－島根県内の3短期大学の比較から－，第28回中国・四国保健管理研究集会報告書，21，1998.
- 5) 横山 恵・福澤陽一郎・磯岩壽満子：島根県立看護短期大学紀要第1巻，73－77，1996.
- 6) 島根県教育委員会・島根県学校保健会・島根県養護教諭研究連絡協議会：島根県学校保健統計調査資料，1997.
- 7) 佐野祥平他：大学生における歯科健康管理，日本公衆衛生雑誌，44(10)特別附録，1140，1997.
- 8) 渡邊達夫：齲蝕と歯肉炎の予防，中国・四国矯正歯科雑誌，3，6－10，1991.
- 9) 吉田秀夫：歯と健康，第27回中国・四国大学保健管理研究集会報告書，13－15，1997.
- 10) 岡本清纓：新口腔衛生学/1，医歯薬出版，1987.
- 11) 石川昭他：地域における歯周疾患予防活動，日本公衆衛生雑誌，42(9)，777－782，1995.